

[外国語]

Interactionを増加させ、英語学習に対する 動機づけを行う指導の工夫

— near-peer role modelの活用を通して —

倉若 拓人*

1 問題の所在

自分の考えや思いを表現し、相手に伝えられるような英語力を生徒につけるのは、全ての英語教師の使命である。中学校学習指導要領（2008）においても「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を図り、「コミュニケーション能力の基礎を養う」ことが目標として掲げられている。また、内容的にまとまりのある文章を作成する力や基本的な語彙や文構造を活用し、発信する力の育成が強調されている。

しかしながら、学習した英語を駆使しコミュニケーションを図ろうとする姿勢を、我々教師が生徒に身に付けさせられているのか、依然として疑問に思うことが多くある。むしろ英語を教室で使うことに対して恥ずかしさを覚え、英語学習に対する意欲すら失いかけている生徒が増えているとさえ感じる。

小・中学校の英語教育に関する基本調査・速報版（ベネッセ教育研究開発センター 2011）によれば、彼らの英語学習への動機づけとして、約8割の生徒が「英語のテストでよい点数を取りたいから」と答えている。これに対して「英語はこれからの国際社会で必要となると思うから」など、英語学習に対する目的意識が読み取れる回答をした生徒の割合はそこから10ポイント以上低い割合である。生徒に目的をもって英語学習に取り組ませ、自分の考えや思いを相手に伝わるように表現させるにはどうしたらよいのか。そして、発信することが重要な課題となった今、どのように彼らの英語学習に対する意欲を高め、表現活動に取り組ませるかが、これからの大きな課題となる。

その一つの解決策として共に学ぶ級友の力を強調することが挙げられる。級友は、同じ文化背景をもち、歳が近い。英語を使いこなしている級友の模範を提示する（near-peer role model以下NPRM）ことによって、生徒は自分なりの方法で、その英語を試そうとするきっかけとすることができる（Murphey 1998）。仲間の活動の様子から、与えられた課題にどう取り組むべきかを学んだり、自己の英語のモニタリングを行ったり、何よりも、自分ならできると強く動機づけされたりすることは、学習者本人にとって有益である。すでに、人は何を、どのように学習すべきかについて自ら制御できると感じ、結果を予測できるときに、興奮物質ドーパミンが分泌され、学習が強化されるという研究結果が実証されている（Sapolsky 2009）。また、他人の行動を見る際に、自分自身がその行動を行っているのと同じように、運動指令ニューロンが活性化され、学習が加速されるという研究結果もある（Ramachandran 2009）。生徒のモデルを見てから言語活動に移ることは、同様に生徒自身の学習を促進させると言える。しかし一方で、教室内での生徒同士の、英語または日本語を介したinteractionの少ない高等学校や中学校の英語の授業の中では、仲間の英語力に刺激される機会はほとんどない、と指摘する声があるのも事実である（Murphey 1998）。小・中学校の英語教育に関する基本調査・速報版（ベネッセ教育研究開発センター 2011）によれば、英語授業に対して肯定的回答が少ない項目は『ALTとの授業が少ない』『英語を使う時間が少ない』となっている。多くの英語教師が指導過程において生の英語に触れさせたり、英語を使わせたりしている一方で、生徒の感じ方には距離があることがわかる。

以上のことから、英語の授業展開過程において、意図的にNPRMを設定し、生徒同士のinteractionを増やせば、生徒の英語学習に対する動機づけとなるのではないだろうか。

2 研究の目的

生徒の英語学習に対する意欲を高めるために、英語活動の際にNPRMを設定することにより

(1) 英語力に関する伸長を感じることができるかを明らかにする。

* 糸魚川市立糸魚川東中学校

(2) 自己の学習に対する動機づけがなされたかを明らかにする。

3 研究の内容と方法

生徒同士のinteractionを増やし、互いの英語学習に対する意欲を高める目的で、2011年4月から2011年7月にかけて、以下に示す点を工夫して授業を構成した。

(1) 普段の授業場面におけるNPRMの設定

① ねらい

教師がALTと、もしくは教師のみで様々な言語活動の例示をすることだけでは十分ではないと考える。同じ文化背景をもち、歳が近く、英語を使いこなしている仲間の様子を見たり、聞いたりして「これなら自分もできる。」「自分ならこうしよう。」と感じさせることは、生徒の英語学習において大きな動機づけになりうる。また、他の学習者と英語の文法や語法、スピーキングやライティングの方法等について質問したり、意見を交わしたりすることは、学習者双方の学習を促進する。そこで普段の授業の中で次の場面でNPRMを設定する。

② 具体的な設定場面

ア 新出語句の発音

教科書本文に出てくる新出単語については、教師対生徒の練習の後、5～6人の生活班に分け、生徒の発音に合わせて、他の生徒が発音を繰り返す活動を行わせる。

イ 教科書本文の音読

新出語句の練習と同様に、教師対生徒の練習や個人の読み練習の後、必ず生徒の範読を聞かせる。そこから生徒同士のペアーディングやピリオドリーティングなど、生徒同士が音読をしたり、わからない部分を教え合ったりする時間をとる。

ウ 文法説明

新出文法の説明の際、ペアを組ませ、教師が指導した内容を、生徒からパートナーの生徒へ再度説明させる。

エ コミュニケーション活動の例文提示

コミュニケーション活動の例文を練習する際に、まず、教師1人2役（もしくはALTと教師）のモデル会話後に、生徒が繰り返す練習を行う。その後、教師対生徒（もしくは生徒同士）のモデル会話を全体の前で提示し、コミュニケーション活動に入る。

(2) プレゼンテーション指導場面におけるNPRMの設定

① ねらい

ただ無目的に単語を書く練習をしたり、パタンプラクティスを繰り返したりするだけでは、自己の英語力がどれだけ伸長しているかを知ることは難しい。自分たちが練習してきた内容が、実際の場面でどのように使用されるのかを学習者に実感させる必要がある。そこで、自己の英語力の伸長を感じさせ、他の級友から英語を学ばせる目的として最も有益な機会としてプレゼンテーションを年間指導計画に位置づけ、以下の計画で指導を行った。

② 具体的な設定場面

2010年3月（2学年時）と2011年7月（3学年時）にクラス全員の前に立ち、原稿を見ずにスピーキングを行う場を設定した。テーマは「自分の好きなもの（3月）」と「誘う・提案する（7月）」とした。形態は3月には個人、7月にはペアで行った（表1の指導計画参照）。プレゼンテーションの際にはその様子をビデオ撮影するということを生徒に伝え、普段の授業とは異なる緊張感をもって練習させようと考えた。また、原稿を見ながら発表することを禁止し、そのとき自分が覚えた内容で発表させることにした。他の発表を鑑賞する活動そのものがNPRMとしての機能を持っているのに加え、発表前にスピーチの原稿やりハーサルの様子を学習者同士で見ることによっても同様の効果が期待できると考えた。

さらに、発表後は、ビデオ撮影したファイルを生徒・職員共有サーバーに保存し、クラスの生徒が自由に閲覧できるようにし、それらを鑑賞した。また、優れた発表を全体で取り上げ、発音や間、立ち振る舞い等を強調しながら解説し、発表者とそれ以外の生徒両方の動機づけを図った。

表1 プレゼンテーション課題の指導計画

時数	○学習内容 ・教師の指導	研究の目的との関連
1 2	○発表原稿の作成 ・過去の生徒の発表原稿を見せ、自分の発表に必要な語彙や内容を知らせる。	①スピーキングの準備段階として、必要な語彙や内容を仲間の発表内容から学ぶ。
3	○リハーサルと練習 ・ジェスチャーや抑揚、間等、非言語要素を指導する。また、その様子を生徒に見させ、自分の発表の参考にさせる。	①スピーキングにおける非言語要素を教師と仲間の指導から学ぶ。 ②他の発表の様子から自己の動機づけとする。
4	○発表 ・ビデオ撮影と司会進行を行う。	②他の発表の様子から自己の動機づけとする。
5	○振り返り ・共有サーバーに保存したファイルを鑑賞させ、生徒同士に発表内容を評価させる。 ・アンケートを実施し、発表への取組と成果を自己評価させる。	②仲間と自分の発表の様子から自己の動機づけとする。 ③過去の自分の発表と比較し、自身の英語力の伸長を感じ取る。

(3) 検証方法

① 授業における生徒の観察

普段の授業の中で、生徒の学習場面における活動の様子を観察し、NPRMの設定により学習への動機づけに関してどのような変容がみられたかを記録していく。

② アンケートとその分析1

学習活動の後に、以下のア～ウの項目についてアンケート調査をすることにより、自分たちの英語力がどのように変化したと感じているかについて検証する。

- ア 英語の発音が上手になったと感じるか
- イ 英語を話したり、書いたりする際に英語を上手に使えるようになったか
- ウ 教師や級友が使用する英語の内容がわかるようになったか

③ アンケートとその分析2

アンケートに自由記述の項目を設け、仲間の活動の様子を見て、自己の動機づけとしているものがあるかを検証する。

表2のように生徒の記述内容を3種類に分類し、レベルⅡとⅢの生徒の割合を算出する。

④ アンケートとその分析3

さらにレベルⅢの生徒を抽出し、NPRMについて感じることにについてインタビューを行い、具体的にどのようなことで動機づけられているのかを明らかにする。

表2 自由記述欄の判定基準とその例

レベル	判定基準	記述の例
Ⅲ	他人の発表内容と自分の改善点について両方を記述している。	・みんな自分のことばのように話していたので、次回は自分も完璧に覚えて話せるようにしたいです。 ・みんな発音がよくて英語らしいと思いました。自分も授業の発音練習を大切にしていきたいです。
Ⅱ	発表内容について、自分か他人のどちらかについて振り返りを記述している。	・僕たちよりも発音が上手なグループがいたので真似したいです。 ・様々な場面や英文があつてとても参考になった。
Ⅰ	記述内容が他の発表内容について関連していない。または具体的でない。	・ちゃんとできてよかった。 ・みんなの発表がすごかった。 ・スピーチはとてもおもしろかった。

4 結果

(1) 生徒の変容

授業観察を通して次のような生徒の変容が見られた。

ア 新出語句の発音指導において

教師役をする生徒が責任をもって発音することになり、他の生徒も普段より大きく、はっきりとした声量で練習に取

り組む姿が見られた。また、クラス全体でも1語ずつ代表生徒に発音させ、クラス全員に繰り返させる手順をとった。この活動の導入後は、声量と発音の英語らしさの面で、明らかに活動への取組が向上した。(声量や発音の変容)

イ 教科書本文の音読において

生徒同士のペアリーディングやピリオドリーディングなどを行った後に、教師とともに発音の確認をすると、声量や流暢さなど、質的な向上がみられた。(声量や流暢さの変容)

ウ 文法説明において

自分自身が理解した内容を自分の言葉で他の生徒に説明するため、自分の理解が不十分であった場合には「わかっていない」という状態に気づき、周囲に質問したり、教えてもらったりするという自発的な活動が見られた。一方で、説明を受ける側にとっても、説明が不十分であったり間違っていたりする場合には、逆に自分の方から説明したり、教えたりする活動につながる様子も見られた。(自発的な質問や活動の増加)

エ コミュニケーション活動の例文提示において

コミュニケーション活動を通して、生徒同士で自分自身も英語を英語らしく使えるようになりたいと、積極的に練習に取り組む雰囲気ができ上がった。また、教師から離れ、隅で仲良し同士固まって練習する姿が少なくなり、教師と意欲的にかかわり、自分の英語を聞いてもらいたいという積極的な姿が見られるようになった。(積極的に活動にかかわる姿の増加)

オ プレゼンテーション指導場面において

まず、前年度に同じ課題に取り組んだ生徒が作成した原稿を見せることで、生徒は自分の発表したい内容に近いものを探したり、気に入った表現方法を探したりして、自分の原稿に書き加えていった。特に英語が不得意な生徒にとっては、大きな助けとなり、活動が停滞することなく学習に取り組む姿が見られた。

また、発音や立ち振る舞いの指導をクラス全体の前で行うことで、それを見ている側が「自分たちならこんなことができるな」と考え、1つのグループへの指導内容を全体に広めることができた。リハーサルは、先行グループを参考とするため、順番が後の組ほど発音やジェスチャー、間の取り方などが向上していった。本番でも練習した通りの発表を行い、生徒の表情には大きな満足感があつた。さらに、振り返り活動では、学校内サーバーに保存した仲間の発表を再度見て感嘆の声を上げるなど、他の学習の成果を肯定的に評価し合う様子が見られた。(他の学習成果から学ぶ姿の増加)

(2) アンケートの分析から

① 分析1「自己の英語力の伸長を感じることができたか」

図1に示すとおり、「4月より英語がわかるようになったと感じる」と回答した生徒は、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」という肯定的評価を合わせると79%であった。同様に「発音が上手になったと感じるか」という質問に対しては91%が、「英語が使えるようになったか」に対しては85%以上が肯定的な回答をしている。このことからNPRMを位置づけた授業を通して約8割以上の生徒に英語力の伸長を実感させる効果が見られたことがわかる。

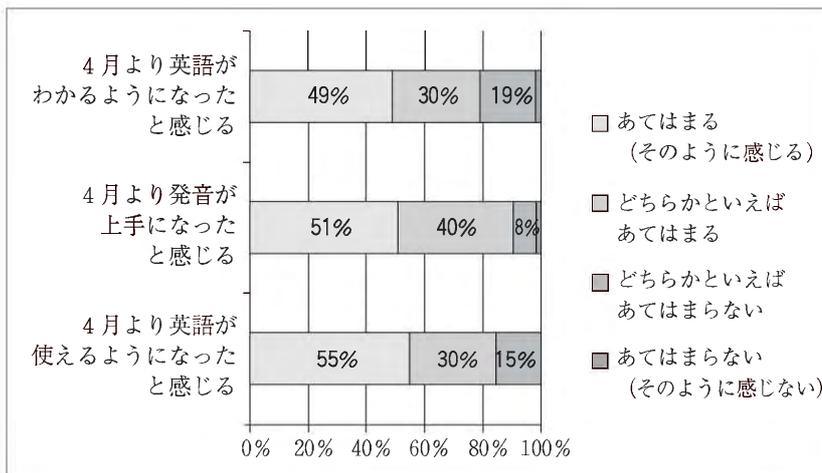


図1 英語学習の振り返りアンケート

② 分析2「学習に対する動機づけはできたか」

自由記述を集計すると、レベルⅢの生徒が28.3%，レベルⅡの生徒が56.6%，レベルⅠの生徒が8.1%であった(表3参照)。半数近くの生徒が仲間や自分の発表の良い部分に目を向けている。さらに3割強の生徒が、改善点に目を向け、今後どのように英語学習に取り組みたいかを記述している。レベルⅡとⅢを合わせると、9割超の生徒において何らかの形で学習への動機づけが行われている。

③ 分析3 「NPRMに対するインタビューの結果」

インタビューによる主な生徒の感想は次のとおりである。どのような場面で動機づけにつながったかという観点から整理すると、3つに分類することができる。

ア 他のモデルを見ることにより動機づけられた

「NPRMを見ている側はモデルを見て、自分も真似したり、もっと上手に話したりしたいという気持ちになる。」

「あまり流暢でないモデルを見たとしても、自分なりの方法で英語を話そうとする準備ができる。」

「教師対生徒や生徒対生徒のモデルを見ることにより、課題をより身近に感じることができ、学習意欲がわく。」

イ モデルとして他に見られることにより動機づけられた

「NPRMになる側も、他の級友に見られているので、上手に英語を話そうという気持ちになる。」

ウ 相互にかかわる活動の中で動機づけられた

「仲間がどのように英語を話しているかがよくわかるので、さらに別の仲間に教えるときに自信をもって説明することができる。」

「教える過程で自分がわかっていない点に気付くことができ、調べたり、教師や別の級友に質問したりしようとする気持ちになる。」

このように、NPRMを取り入れた学習の中では、様々な形で英語学習への動機づけが行われた。

表3 自由記述欄のレベルごとの割合

	生徒の割合
レベルⅢ	28.3%
レベルⅡ	56.6%
レベルⅠ	8.1%

5 考察

以上の結果から、以下の効果があったと断定できる。

(1) NPRMを活用した授業によって生徒は英語力の伸長を感じることができた。

まず、授業の観察で「声量の増加」や「流暢さの向上」などがみられたことから、生徒が自信をもって英語を発声するようになったことがわかる。次にアンケートの結果から、生徒自身が「英語が理解できるようになった(79%)」、「英語の発音がよくなった(91%)」、「英語が使えるようになった(85%)」と感じている。このことから、NPRMを通して生徒がしだいに自信をもって学習を進めることができるようになり、英語力の伸長について実感をもてるようになったと考えられる。これはアンケート分析3のインタビューに対する「仲間がどのように英語を話しているかがよくわかるので、さらに別の仲間に教えるときに自信をもって説明することができる。」という感想からも裏付けられる。

(2) NPRMを活用した授業によって学習に対する動機づけがおこなわれた。

授業の観察の中で「周囲に質問したり、教えてもらったりする自発的な活動が見られるようになった」、「隅で仲良し同士固まって練習する姿が少なくなり、教師と意欲的にかかわり、自分の英語を聞いてもらいたいという積極的な姿が見られるようになった」などの変容が確認された。このように、積極的に学ぼうとする姿が多く観察されるようになったことから、生徒一人ひとりの中で学習への動機づけが高まったと考えられる。

一方、アンケート分析2の結果から、多くの生徒が他の活動を参考にし、具体的に自分の活動に結びつけながら振り返りを行っていることがわかった。今までの学習活動では、振り返りの記述内容が個人の枠の中に留まりがちであった。これに対してNPRMを取り入れたことにより、生徒の記述が広がりや具体性を増してきている。この広がりや具体性は次の学習への動機づけに強く結びついていると考えられる。

また、アンケート分析3の結果から、NPRMを活用した授業では、単に他のモデルを見ることによってだけ動機づけをされるのではなく、他の級友から見られる活動やお互いにかかわる活動の中においても、多様な形で相互に動機づけられていることがわかった。

(3) 生徒同士のinteractionが増加し、学び合う学習環境が醸成された。

授業観察の中で「周囲に質問したり、教えてもらったりする」活動や「他の学習の成果を肯定的に評価し合う」様子など、生徒同士がNPRMを通して積極的にかかわろうとする姿が見られるようになった。また、前述のアンケート分析3のインタビューにおいても「教師対生徒や生徒対生徒のモデルを見ることにより、課題をより身近に感じることができ、学習意欲がわく。」「あまり流暢でないモデルを見たとしても、自分なりの方法で英語を話そうとする準備ができる。」「教える過程で自分がわかっていない点に気付くことができ、調べたり、教師や別の級友に質問したりしようとする

る気持ちになる。」という回答があった。

このことから、NPRMが単に生徒同士のかかわりの場を増加させるだけでなく、かかわり合いながらお互いに学習への動機づけを行い、学習意欲を高め合っていく、「学び合う学習環境」を醸成していると考えることができる。

6 今後の課題

本研究を通して、言語活動の前・後・途中でNPRMを設定し、言語活動を展開することは、学習者の意欲を高め、言語活動そのものの活性化につながるということがわかった。

それは、NPRMによって、学習者が「責任をもって言語活動に取り組まなければいけない」「自分も真似して上手になりたい」「一つの課題ができるようになったから次もがんばりたい」という、英語学習に対する動機づけが促進されるからである。また、活動の内容が理解しやすくなるということは協同的・支持的な雰囲気を生み出し、学習者が自信をもって課題に取り組む姿勢をつくり出す。加えて、単元や学期単位で、NPRMを伴うプレゼンテーションの課題を設定することで、学習者自身が英語力を確認し、その後の英語学習に対する意欲を高め、話す力を含む英語力のさらなる向上につなげることができる。

一方、指導者がNPRMの位置づけを考えることで、基本的な発音練習やパタンプラクティスをコミュニケーション活動やプレゼンテーション活動にどうつなげるかを工夫して配列しようと心がけ、指導計画を入念に立てるようになる。そして、学習グループのメンバーを組織化し学習形態を十分に検討するようになる。その結果、指導内容に有機的なつながりをもたせ、協同的な雰囲気のもと、学習指導が行える。さらに、学習者が主体となって活動する時間が増えるため、指導者が学習者の活動を「みとる」時間を確保でき、個々の生徒に対する指導を充実させることもできる。

上記のとおり、NPRMの設定を通して得られる学習者・指導者双方への波及効果はとても大きい。今後も継続して適切な場面でNPRMを設定し、最大限に効果が得られる指導計画を練ることが求められる。また、4技能を高める上でどのようなNPRMの位置づけが各技能の向上に有益かについて検証が必要である。その点で、我々指導者は、学習者が英語を使おうと努力するための「足場」を固め、構造化していかなければならない (Murphey 2010) という考えに一致する。今後はNPRMの設定を指導計画のどこに位置づけるべきかをさらに検証し、効果を高めていきたい。

7 参考文献

- ベネッセ教育研究開発センター (2011). 『小・中学校の英語教育に関する調査・速報版』
- Murphey, T (1998). Motivating with Near Peer Role Models. *On JALIT'97: Trends & Transitions*, 201-206
- Murphey, T (2010). Creating languaging agencing. *The Language Teacher*, 34(4), 8-11.
- Ramachandran, V (2009). The neurons that shaped civilization. Retrieved August 5, 2012 from http://www.ted.com/talks/vs_ramachandran_the_neurons_that_shaped_civilization.html
- Sapolsky, R (2009). The uniqueness of humans. Retrieved August 5, 2012 from http://www.ted.com/talks/robert_sapolsky_the_uniqueness_of_humans.html